

少年の時

奥田継夫 作 山口幸平 画



913

少年の時

奥田継夫 作 山口幸平 画

東京 小学館 昭和 56 (1981)

142P 22cm

(小学館の創作児童文学シリーズ 23)

少年の時

一九八二年七月十五日

定価・七八〇円

初版第一刷発行

著者・奥田継夫

画家・山口幸平

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社 小学館 (〒一〇一)

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一

電話・東京〇三(二三〇)五五四一(編集)

五三三三(製作) 五七三九(販売)

振替・東京八一〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

★製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、著
丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえ
します。

★本書の内容の一部または全部を無断で複写複製(コ
ピー)することは、法律で認められた場合を除き、著
作者および出版社の権利の侵害となりますので、その
場合は予め小社あて許諾を求めてください。

日本音楽著作権協会許諾番号 第八一〇一四〇二号

少年の時

奥田 継夫 作

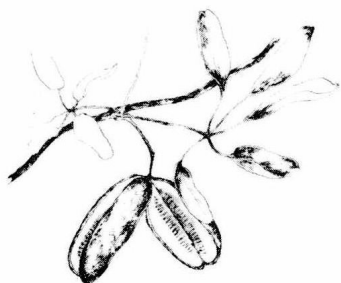
山口 幸平 画





装幀デザイン
中野博之

V	IV	III	II	I
星 ^{ほし}	風 ^{かぜ}	滝 ^{たき}	雪 ^{ゆき}	光 ^{ひかり}
の	の	の	の	の
季 ^き	季 ^き	季 ^き	季 ^き	季 ^き
節 ^{せつ}	節 ^{せつ}	節 ^{せつ}	節 ^{せつ}	節 ^{せつ}
125	108	67	41	6



奥田維夫（おくだ つぐお）

一九三四年、大阪に生まれる。同志社大学文学部卒。飲食店自営。大阪文学学校、朝日カルチャーセンターで児童文学を担当。

集団疎開の経験をへて小学五年生で終戦を迎える。このときの体験がその児童文学の核をなしている。本書もその時期のもの。代表作として、戦後三部作——「続いていた青い空」「中学時代」「夏時間」がある。ほかに絵本、翻訳など多数。

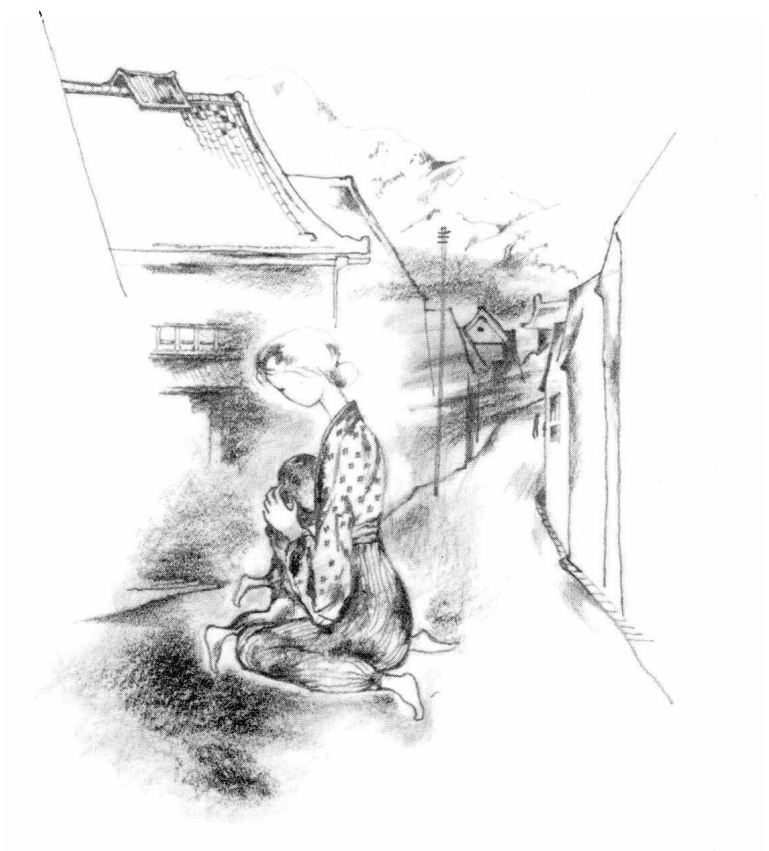
現住所／大阪市北区中崎町二二—一〇池内方

山口幸平（やまぐち こうへい）

一九二五年、三重県に生まれる。法政大学経済学部卒。現在、二紀会同人。装幀、さし絵の仕事に、「骨の城」「夏の小鳥たち」「冬の日のエマ」「夏時間」（これは奥田維夫氏とのコンビ）、「少年のブルース」などがある。

現住所／三重県桑名市三之丸三七

少年の
時



I 光の季節



I

赤ちゃんだったころのぼくは、セピア色にくすんだ写真の中なかにいる。

まるはだかのその一葉ようは、おふくろにきくと、満一歳まんさいの誕生日たんじょうびに近所きんじょの写真屋しゃしんやでとったという。
“おふくろ”と今いまでこそいっているが、ぼくが“ボクちゃん”であったころは、お母ちゃんかあ。孫まごができてからは、おばあちゃん。

が、ぼくにとっては四十七歳きざいになった今でも、お母ちゃん。

お母ちゃん。あたたかいひびき。口くちの中で、ころがただけで安心あんしんできる。人ひとはだれでも、お母ちゃんを持もっている。お母ちゃんはふるさとなのだ。

それが証拠しやうこに、人間にんげんはお母ちゃんのおなかの中に十月十日とつきとうかいることになっている。その間かんはお母ちゃんの一部ぶでさえ、ある。

ある日ひ、ぼくはそのお母ちゃんの産道さんどうを通とおって、この世よとやらへ顔かおをのぞかせた。

その日はお母ちゃんと別わかれた日であつたが、その日はまた、お母ちゃんにはじめて会あつた日でもある。

そして、満一歳。

写真みで見るかぎり、なんと福々ふくふくしかつたことか！

お母ちゃんの顔かたちの形をうけついで、丸顔まるがほ。お月さんというアダナがついていたのも、うなずける。お月さんはこぼれるような笑顔えがほで、両手両足りやうてりやうあしをひろげて、おっちんしている。

からだにくらべて、大きな頭あたま。

小っちゃい手て。

小っちゃい小っちゃい、アクセサリアクセサリのようなチンチン。

2

余談だが、チンチン。

ポがつく単語とは大抵がいである。ポは棒。

チンチンには棒がない。澄みきった音。

ポがつくと、きゆうにおとなっぽくなる。

3

余談をつづける。

ぼくはぼくが子どものころ、人が「チンチン電車」というとき、または犬に「チンチン！」させているとき、きまって「チンチン」を思いうかべた。

むかし、といっても、戦争ちゅう、旗日など、学校で校長が教育勅語を読んだ。

「朕惟フニ我カ皇祖祖宗……」

天皇は自分のことをチンというが、ぼくにはその意味がわからなかった。それをきくたびに、チンチンがなにを思ふのかなあと考えた。

ついでにいうと、「我が皇祖祖宗」。これがまた「コソコソ」ときこえて、エライ人のイメージ

に重ならなかった。

「チンチンがコソコソと何をするのか?!

当時、こんなことをいおうものなら、たちまち、不敬罪に問われて、ブタバコ行きと相なった。しかし、おとなたるもの、子どもが誤解するような、こんなむずかしいことをあまりいわないように、気をつけたい。」

4

ぼくがお母ちゃんの子宮の中から産道を通して、この世に出てきた事実を知ったのは、ずっとずっとあと、中学生になりたてのころだった。

「そんなことも知らなかったん。」

ある日、三つ歳上の姉ちゃんからバカにされて、いたく、少年の自尊心を傷つけられた。

「どこから出ると、思ってたん?」

「女の人にはおへその下に黒い線があるやろ?」

「そんなもん、あるかいな。」

「小っちゃいとき、おばあちゃんのおなか、見たこと、あるねんけどなあ。」

「どこにあるのん?」

姉ちゃんはばばばあとスカートをめくって、おへそから下を見せてくれた。まぶしかった。
「それは姉ちゃんが子どもを産んでへんさかいや。」

それでもまだ信じられなくて、がんばるぼくに、

「この子、おませやおませや、思てたけど、うぶなとこ、あるねんなあ。」

姉ちゃんに軽蔑されて、ぼくは一瞬はあんとしたあと、顔をしかめた。あのころは、おとなでないと思われることがたいへんな屈辱だった。

あんな細いひっかき傷みたいなスキマから、どうして、ボールのような頭が出てくるのか？

しかも、手も足も胴もついて……。

それから、長いあいだ信じられなかった。いつか、芥川竜之介の『河童』を読んだとき、すべてがカバツとわかった。

旦那さんの河童が奥さんの生殖器に口をつけて、おなかの中にいる赤ちゃんにきく場面。

「お前はこの世に生まれて来るかどうか、よく考えたらうえで返事をしろ。」

こんなセリフだったと思う。

これを見つけてからは、この場面をなんども読んだ。

そのころは世の中が苦しいところなどと、ちっとも思っていなかったもので、このセリフのほんとうの意味は理解できず、ただただ、刺激的な想像だけがかきたてられた。

芥川竜之介が「ぬめぬめ」と表現している河童のように、ぬめぬめした印象。

お母ちゃんのアソコから出てきたと知ってからは、まともにお母ちゃんの顔を見られなくなつた。

5

中学生のぼくに、いさぎよくスカートをめくってくれた姉ちゃん。その姉ちゃんとは小学生のころ、お医者さんごっこをしたことがある。

場所は家の二階。

季節は冬。

ぼくと姉ちゃんはアトサシで、ねていた。アトサシというのは、両方からねまを敷いて、足のところにふとんを重ねることだ。

かたわらには、おばあちゃんがいつもねていたが、その日は留守だった。

端と端から大声でしゃべっていた。子どもはそうでなくても、よくしゃべるものだ。まして、大好きな姉ちゃんだし、ちょっぴりおとなのふんいきをただよわせてきた姉ちゃんでもあった。ぼくとしては、大いに心がはしゃいでいただろう。

「ボクちゃん。」

姉ちゃんのやや改まった声^{こえ}がした。

「あんた、ねた？」

「ううん。」

「ええことでしょうか？ こたつのとこまで、もぐつといで。うちも、もぐっていくさかい。」

天井^{てんじょう}を向いて、緊張^{きんちよう}している姉ちゃんの姿^{すがた}が、反対^{はんたい}のところ^{ところ}にねているぼくの頭^{あたま}の中^{なか}に思いうかんだ。

ふとんもぐりは興奮^{こうふん}する。おぼけ屋敷^{やしき}やトンネルや胎内^{たいない}くぐりに似^にている。心地^{こころ}よいふとんからたを密着^{みつちゃく}させて動く。秘密^{ひみつ}めいたにおい^{うご}がする。

ねまの中であおむけからうつむけになるだけでも、いつもとちがう感じ^{かんじ}になるのに、四つんばいになって、ふとんを背中^{せなか}で持ちあげて、後ろ^{うしろ}へ後ろ^{うしろ}へさがっていくのだから、すごい。途中でクルリと方向^{ほうこう}を変^かえると、ふとんのすきまから部屋^{へや}のあかりが黄色^{きいろ}く見えた。

姉ちゃんが頭でふとんをささえて、待^{まち}っていた。二つの目^めがわずかな外^{そと}の光^{ひかり}で光った。

「こっち、こっち。」

小声^{こごえ}でいう。

息苦^{いきぐる}しかった。

姉ちゃんのおいだった。姉ちゃんがささやく。

「ボクちゃん。お医者さんごっこしよう。」

ごっこなら、鬼^{おに}ごっこやままごと、売り屋^やさんごっこ、電車^{でんしゃ}ごっこ、学校^{がっこう}ごっこなど、よくし
てきた。

お医者さんごっこだけ、したことがなかった。

どうしていいのか、わからないぼくを見て、姉ちゃんはぼくの手をズロースの中へみちびいた。
姉ちゃんのソコには何も^{なに}なかった。

「筋^{すじ}、いってるやろ？」

姉ちゃんはいった。

「そこから、おしっこ、出るねんし。」

姉ちゃん、五年^{ねんせい}生。

ぼく、二年生。

「うちにも、さわらして。」

姉ちゃんの手がぼくのパンツの中に入^{はい}ってきて、チンチンにふれた。

「わあ、ぐにやぐにや。ここからおしっこ出るのん？」

「ぼく、おしっこ、ちびりそう。」

姉ちゃんは笑^{わら}いだしたが、声をすぼめて、「ボクちゃん。」と、いった。

「なに？」

「お医者さんごっこしたこと、お母ちゃんにいうたら、あかんで。」

「ん。」

ぼく、七歳。

姉ちゃん、十一歳。

6

この二階の部屋で、壁の上に、幻を見たことがある。

一回目はへのへのものに似た女の子が右手にあらわれ、動いた。映画というより、幻燈のようだった。今ならアニメーションである。

二回目は、馬に乗ったサムライの一群。

このほうは、映画『菊池一族の最後』とかいう時代劇をお母ちゃんや姉ちゃんと見に行ったので、それがよみがえったと納得できる。が、一回目だけは今だにわからない。

それは、あまりにもあざやかな幻だった。幻としかいようなない出来事だった。

へのへのもの女の子は、その後も何回も立ちあらわれた。ふとんの上に起きあがって幻を見ている自分の姿まで思いうかべられる。

夢ではない。

幻である。

この二階の部屋は今はない。三十六年前、昭和二十年三月十三日、大阪の大空襲で焼けてしまった。

おばあちゃんもこのつぎの日、死んだ。

7

おばあちゃんのおもかげは心の中に生きている。

そのころ、家に風呂のあるところは、すくなかった。一家そろって、お風呂屋に行った。

おばあちゃんは浴室からあがったところ、脱衣場の足ふきの上に立っていた。

女湯である。

何歳くらいまで女湯に入っていたのか？

おばあちゃんは湯あいでからだをふいていた。

丸ぼんをのせたような髪。たれさがって、しなびているお乳。おへその下がガラアキだった。

後年、姉ちゃんにいつて軽蔑された、おなかの線も、このとき見たにちがいない。

線の下に、しょぼしょぼと生えた灰色のふくらみ。